

仙台教区報

発行所カトリック仙台司教区事務所
980 仙台市本町一丁目2番12号
電話〇二二二一七三七七番
編集・発行人 首藤 正義

第15回 福島県カトリックの集い

― こどもの宗教教育を考える ―

9月15日、郡山ザベリオ学園を会場に県の集いが開かれた。集いは三部。第一部―ミサ。第二部―グループ話し合い(大人)・バレエ・ボール(青年)・子供の集い。第三部―音楽会。信徒約350人が参加した。

ドミニコ会、グアダルベ会の司祭、総勢14人による共同ミサの中で司教は8月の聖地巡礼に触れて次のように語った。「ユダヤ教では男子は13歳になると『律法の子』になる儀式がある。木曜日、広場に子供と大人たちが集まり、広場に据えられた机の上にトーラが立てられ、子供はこれを読むことになっている。つつかえながら読む子供を大人たちは助けながらその儀式は終る。そこに『信仰を語り伝える』姿を見た。この姿は今日の私たちにも大いにあてはまるのではなからうか。親は自分の信仰生活を見せることによつて子供に信仰を伝えていく。日常の立ち居振舞いの中でキリストの光を輝かせていく、私たちのともし灯は小さいかも知れない。しかし数多くの小さい灯が集まれば大いなる輝きを増すに違

いない。また信仰は個人の中のみとどめおくものではなく外にも向かうものである。同じ神の子として創られたアジア・アフリカの、貧困・飢えに苦しむ仲間にも心を向けることも忘れてはならない。この集いが新しい飛躍の第一歩となりまますように」。

第二部の話し合いは5つのグループに分けられ、各グループ35人位で1時間30分の話し合いであった。問題提起者を特に置くことなく司会者と書記だけが決まっております、当番教会であった郡山教会がこの集いの実行委員会を形成して、「話し合い参加のしおり」が作成されてあった。従つてそれを参考にしながら話しが進められた。

話し合いのテーマは「子供の宗教教育について考える」で、7つほどの項目が「しおり」にとりあげられていた。「子供の教会ばなれをどう考え、どうしたらよいか」「子供をどう理解し、どう対応するのがふさわしいか」「聖書のことばを生活の場面に、子供の血肉にするために」「子供のモデルになり得る

親の生きざま」「気負わない親子の関係」、「誇らしげなカトリック者として」「教会での子供への具体的手だて」

話し合いの中で中・高生を持つ親の悩みが出され、学校行事と教会活動とのぶつかりが子供の宗教教育に大きな妨げとなっている。また、教会に子供のための場があるところでは、多少この問題も解消されているとのことであった。

第三部の音楽会は神父たちの歌、そして教会の母親たちのコーラス、青年たちのギター演奏に一同声を合わせてなごやかなひととき。参加者の声。話し合いの時間が足りなく、テーマを絞つて深く話し合いたかった。子供の広場があつたので話し合いに参加できた。

司教 日程 (9月14日現在)



- 9月30日 塩釜教会堅信
- 10月1/2日 ペトレム会月例会(盛岡)
- 3日 常任司教委員会(東京)
- 4/5日 神学校常任委員会(東京)
- 7日 白河教会堅信
- 8日 教区司祭団役員会(仙台)
- 9日 カリタス・ジャパン運営委員会(東京)
- 13日 社会福祉法人会合(仙台)
- 14日 オグジリエ集会(仙台)
- 18日 カリタス・ジャパン事務局(東京)
- 23日 難民対策連絡会議(東京・外務省)
- 24/26日 宗法連本山研修
- 28日 松木町教会堅信
- 29/30日 難民定住教区担当者会議(伊東)
- 31日 カリタス・ジャパン事務局(東京)
- 11月3日 十和田教会百年祭

改築工事始まる ……………

フアチマ幼稚園(鮫教会) ……

東北カトリック学園(カトリック仙台司教区が母体となり、教区名儀幼稚園をもつて設立した学校法人で、現在設置する幼稚園14を擁す)では、八戸・フアチマ幼稚園(園長・渡辺昭一師)の園舎改築工事を始めた。

これは、老朽園舎新改築10か年計画にもとづいて行なわれるもので、昭和56年度には、イメルダ幼稚園、昭和57年度には気仙沼カトリック幼稚園、昭和58年度には石巻カトリック幼稚園、それぞれ鉄筋コンクリート二階建の新園舎の完成をみた。

今回は4回目の園舎改築事業で、大林組が施工、本年11月には完成の予定である。

祈ることこそ

宣教司牧の原動力



9月3日から7日まで、クレメント師の指導で邦人司祭団の黙想会が光ヶ丘研修所で開かれ、15人の司祭が参加した。

講話は一日2回で、「祈り」「聖なる司祭」「謙遜」「回心」「キリストを見せる」「司祭職」「苦しみ」「生きた信仰」「愛」について話された。講話のはじめに沈黙のうちに「イエズスの現存」をおもひ、全講話で、祈ることが強調され、特に一日1時間、継続して祈ることがすすめられた。普段、宣教・司牧に忙殺されている司祭たちは、祈ることの重要性を再確認した。

来日50周年を祝う

聖母被昇天修道女会



聖母マリア誕生の祝日9月8日、聖母被昇天修道女会は青森の本部で来日50周年を祝った。記念式典は佐藤・島本・長江の三司教とケベック会、ドミニコ会、邦人司祭の総勢20人による共同式ミサで始められ、会ゆかりの人々170人が共に50年の歩みに感謝を捧げた。この式典に、総長と共に最初に来日したシスターの一人、Srコロナ・マチュ・ローザがカナダから参列し、彼女の修道誓願50年と合わせて二重の喜びであった。

当修道会はドミニコ会の招きで一九三四年5人のシスターの来日によって始められた。最初は「青森技芸学院」を譲り受け、洋裁・西洋料理・音楽を通して子女の教育に携わり、現在は浦和と仙台教区で、幼稚園・高校・短大等の教育活動を通しての宣教司牧に励んでいる。現在教区内で働いている会員は邦人30人、外国人9人の39人(S58・12・31現在)である。

八戸家庭宣教を終えて

女子パウロ会(仙台)



八戸塩町カトリック教会主任司祭児山師の御依頼により、昨年新築された教会を八戸の人々に紹介するために家庭宣教を始めました。7月4日、仙台から三名のシスターとシスターの卵二名が八戸へ向かいました。途中から降り始めた雨が丁度しやぶりの中、目指

す八戸塩町カトリック教会に着きました。私たちはみことばの種と共に梅雨も八戸に運んだらしく、最初の四日間位は、しとしとと降り続く雨に悩まされてしまいました。それでも小雨になるのをまつて、傘を片手に教会のすぐ近くから始めました。教会の新築はよく知られていて、またイメルダ幼稚園にお世話になったという方が多く、比較的よく受け入れられました。これは教会から離れた場所でも同じでした。

全体的に共働きの家庭が多く、大きな家では、お年寄が一人で留守番されていて、「目が見えない」「聞いても何もわからない」と断わられ、荘とかハイツという所は留守宅が多いようでした。私たち以外にもセールの誘いが多いせいか拒否反応が強いと感じました。一番印象深かったことは、「今心に余裕がない」という人の多かつたことです。一見、衣食住すべてが満ち足りてみえるこの生活を送りながら、一体なんのために心の余裕がなくなる程働いているのだろうかと思いを抱かずにはいられません。一軒一軒の家庭に残したパンフレットを通して、一人でも多くの人が真の豊かさになめざめ、失いつつある心のゆとりをとり戻されるようお願いしつつ宣教を終えました。

最後に、私たちのためにたくさんのお祈りと協力をしてくださった児山神父様と信徒の皆様、ウルスラ会のシスター方に心より感謝を申し上げて、宣教報告を閉じます。

高校生の夏期合宿.....

各地で開かる.....

今年も、仙台教区の各県で高校生のための夏期合宿が行なわれた。

青森県では信徒連絡協議会と青少年司牧委員会が主催で、ヤング・クリスチャン・トレーニング・スクールが8月1日〜3日、15人の参加をもって行なわれた。今回は精神薄弱者に対する高校生の見方を考える、という事で県の福祉センターを用い、精神薄弱者の人と共に作業と話し合いの三日間であった。

岩手県では盛岡の高校生が中心となつて8月9日〜11日、宮古教会で「人間」をテーマに行なわれ、28人が集まつた。今回は今までと違つて未信者の高校生が3分の1参加し、高校生自身が企画・運営し、皆に呼びかけた。

宮城県では二つの合宿が行なわれ、一つは「人間の大地」(犬養道子著)を読んで飢えに苦しむ仲間のことを考える合宿。盛岡からの3人の高校生を含めて13人による読書会方式の合宿であった。もう一つは「性を考える」ということでシスター熊谷(スベルマン病院産婦人科)と早坂養吉氏(開業医)を迎えての二泊三日の勉強会で15人の高校生が集まつた。いずれも光ヶ丘研修所で開かれた。

.....
合宿に参加して

山口直人(東仙台教会)



「飢える」 そんなことを聞いても何があるんだか分からなかつた。我々が、難民たちに

援助をしている募金が難民たちにとつてあまり必要なものであつたのではなかつた。難民たちは、自分を証明するパスポートが必要だつた。日本人を彼らは、どう見ているか知らないけど、日本人には日本人なりに優しい人だつてけつこういふ。現地に行くことのできない人々が寄付しているのだから.....

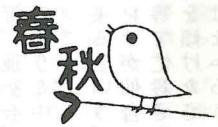
飢えについて考えたことはない。ただ部活や遊んで疲れて、腹へつた時ばかりはいつも腹がちくちく痛くなる。もしかしたら、そんな思いで難民たちは生活しているのかと思うと、本當につらい。ぼくたちはあまりに食べ物をそまつにしている。昨日の夕食は、食べるのがつらかつた。でも残すわけにはいかない。食べられない人もいるのだから、本當に飢えて死ぬ人、一時間に何千人と死ぬのに、腹いっぱいだから残すとはいえない。

この合宿に参加して、改めて「飢える」とことを認識した。今後の生活にこのことを絶対に生かしていることと思う。

韓国・フィリピンのワーク・キャンプに

5人の青年(元寺小路教会)が参加

アジアを知り、友だちになろう、というところで企画されたワークキャンプ(京都教理センター主催)に5人の青年と1人の神父が参加した。次号から4回にわたつて青年たちの報告を連載する予定。百聞は一見にしかず、の生の声が期待できさうである。



例年になく暑い夏も去り、鈴虫の音が心地よく響きわたる季節になりました。間もなく私も東京の神学校に戻りますが、今は心静かにこの夏の様々な出来事を

かみしめ味わいたいと思っております。休みの前半は各地の教会の夏期合宿を手伝うことにより、様々な人々と出会うことができました。東京豊田教会の子どもたち、八戸塩町教会・盛岡四ツ家教会・元寺小路教会の子どもたち、みんな元気に学校へ通っているかな?夏期合宿中に体験したうれしさ・辛さが君たち一人ひとりの心の中で熟し、こうして、君たちが友だちとの関わりの大切さにもつとつと気づいてゆきますように。そして、その関わりの中に、実は、イエズスさまもいらつしやるということに目が開かれますように。

夏期合宿中の様々な出来事を思い返してみるとき、更に、その後の元寺小路教会の皆さんとの関わりをふり返るとき、それらの出来事一つひとつが何を語っているのか、心静かに受けとめてゆく必要を感じます。忙しさに流されがちな今日にあつてこそ、マリアさまと同じように、折にふれて「思いめぐらす」ことが望まれているように思われるのです。(会津)

おらが教会

(46)

青森・三沢教会



現在三沢教会が建っている付近一帯は、今から三十五年前までは、ほとんど建物とてない見渡す限りの畑と空地でした。教会から七、八キロ離れた場所では、冬になると時折食物を探して歩きつねの足跡が見られる程の閑散とした場所でした。従って、日本人のための教会とて勿論なく、終戦後米軍基地内に米軍人のための教会があるのみで、数少ない三沢の信徒達は、三本木教会（現在の十和田教会）で洗礼や堅信を受けたり、また主日の御ミサにあずかるため、三沢駅から電車で約30分程かかる三本木へ通ったものです。この教会が出来たのは、昭和25年で聖年にあたり、初代の主任司祭にはカナダからいらしたケベック会のゴードリ神父様が着任され、聖堂及び司祭館を建てることになりました。

その時、米軍の司祭及び米軍並びに日本の信徒達や一般の方々から、資材の購入や労力の提供などで大きな協力を得て、教会の完成と共に「聖母被昇天」と命名されました。三年後主任司祭がかわり、現在六代目のアンドレ・

レヴェイエ神父さまに引き継がれています。昭和26年、幼稚園も設立されました。それから皆さまの希望と献身的な努力のお陰で、教会の敷地内に墓地が作られ、十字架も建てられました。お花も皆さんの家から持ち寄り、春から秋にかけてきれいな花が咲いており、その側に「パウロ三木」の像が建てられ、聖堂の前には、「祈りの聖母マリヤ様」の像も建立されました。その前で信徒の方や一般の方及び子供達のお祈りしている姿がよく見受けられます。現在は信徒数もふえ、数多くの受洗式や結婚式も行われています。

その後教会の建物も老朽化し、十二年前には内装の修理を行い、また三年前には外装工事を行いました。その折には、司祭や信徒及び一般の方々からも多大な援助資金を頂き、見違える程きれいになりました。毎週土曜日の夜六時半から御ミサがあります。土曜日にすることになったのは、信徒達の希望によるものです。現在の信徒数は八十名位で、毎週御ミサにこられる方は平均三十五、六人です。

御ミサ後に茶話会をやっております。その

時お互いの年齢に応じて経験談を語り合ったり、子供の養育や喜び、並びに悩みなどを打ちあけ合える愛の交わりの場所ともなり、家族的な雰囲気一杯です。御降誕祭には百五十名、復活祭には六十名位集まります。復活祭とか信徒達のパーティーがある時には、手作りの自慢料理を持ち寄り、旧交を暖めております。文化祭には、バザーを開いて、不用品を持ち寄ったり、ケーキを売ったり、また大人、

子供のための本を信徒達が自発的に選んで、多くの人に読んでもらいカトリック精神を良く理解して欲しいと望んでいます。幼稚園の先生方も教会の行事がある度に自分から率先して信徒と共に協力し合い、良く活動してくれております。

また、聖堂の隣りに「ニコニコ部屋」と言つて、信徒の方が園児を幼稚園の終了後五時半まで見てくれています。工作や、お絵かきやいろんなお話などをして指導しており、お天気の良い日は太陽を一杯浴びながら、園庭内を思いきり遊ばせております。時々子供達が自分から聖堂に行き、神様に小さな手を合わせてお祈りしています。園庭内に動物や小鳥達を飼育し、子供達に自然観察を教える一助としていきます。

信徒の活動面では、聖堂及び司祭館の掃除、墓地の清掃、また結婚式やお葬式の準備を皆さんでやっています。また、御ミサに来られない信徒の方や病氣の人に、安否の電話をかけたたり、訪問するようにしております。

(アルフォンソ・大沢)

【編集後記】

秋、本番。教会内外ともに行事が駆けめぐる季節。運動会、バザー、研修会、イモ煮会：そのようなか中で突然のように飛び込んで来たビッグニュース。あのマザー・テレサが仙台に来るといふ。来る11月21日午後、マザー・テレサが仙台で講演を行なう予定である。行事等で忙殺されそうな私たちに、「神の声にも耳を傾けなさい」との神様のイキなはからいではなからうか。

(一首)

昭和五十九年九月十五日

仙台教区のみなさまへ

仙台教区司教総代理

齋藤 石雄

初秋の気配が感じられますこの頃、如何お過ごしでしょうか。

去る四月、佐藤司教様から、カテドラル(司教座聖堂)再建設の問題のまとめ役を仰せつかって、はや、半年近く過ぎてしまいました。この間、前任者方が積み重ねてきたことをよく調べ、今後の方向について考えて参りましたが、全教区民の母なる教会であるカテドラルの再建設計画は、やはり、教区民全体で共に考え、力を合わせて進めることが肝要と思われます。つきましては、これまでの経過を簡単に報告申し上げ、今後の計画推進へのご理解・ご協力をお願い致したく、お便りさせていただきます。

カテドラルは、昭和二十七年、戦後の混乱期に、あくまでも暫定的に、木造モルタル様式で建てられたものですが、近年、その老朽化が激しく、修理費も年々嵩み、危険性も専門家により指摘されるようになりました。そのため、まず地元、元寺小路教会内では、昭和五十四年一月に「元寺小路教会聖堂建設委員会」が設置され、建

設資金の蓄積が開始されました。

ところで、現在、カテドラルが所在する敷地内には、聖堂のほか、教区事務所、小教区司祭館を含め、計七棟の建物が雑居しており、いずれも、随時必要に迫られて建てられてきた結果、敷地全体としては、極めて効率悪い利用のされ方をしております。そのため、それらの建物全体の老朽化もさることながら、多様な活動がますます求められてきている今日にあっては、機能面、規模などの面で、教区の中心的役割を果たすには無理な状態になってきております。

そのような訳で、カテドラルの再建設にあたっては、教区としても、敷地全面にわたる総合的な再利用を考える必要に迫られ、昭和五十五年十月に、佐藤司教様の呼びかけで、深沢豊治神父様を委員長とする「カテドラル再建企画委員会」が発足し、教区としての総合的計画づくりが始められました。

昭和五十六年三月、同委員会の委員長が、司教総代理三浦平三神父様に引き継がれるに及び、委員会は解散さ

れ、新たな出発のために、「カテドラル建設計画を理解していただくために」と題する文書が出され、建物配置図、及び設計図案などの資料をもとに、各地区の司祭・信徒の代表者で構成される司牧評議会で審議・検討されました。

次いで同神父により、「カテドラル建設計画、これからの行動計画についての所見」なる文書が、佐藤司教様宛の答申として提出され、その中で、「教区各層からの意見をまとめて、計画推進の資料とする」という大きな方向づけがなされました。また、昭和五十八年九月の司牧評議会では、カテドラル建設資金募金運動開始のことも検討されました。

以上のような経過を経て、新しい構想に基づく建設委員会が設置され、本年四月より、本格的に推進される筈でしたが、三月の人事異動により、三浦神父様から私が引き継ぐことになり、状況の把握に時間を要したこともあって、この半年間は、計画推進を中断せざるを得ませんでした。

私に課された使命は、今までの委員会や司牧評議会で審議・検討されたことを一つ一つ実行に移してゆくことと心得ております。しかし、このカテドラル再建設計画を進めていく上で最も大切な、かつ最も根本的なことは、教区民全体がカテドラル再建設についての理解を深めることであると考えます。そのため、今後は、教区民の意

見をよく聞き、寄せられた意見を集約し、フィード・バックし、それらを煮詰めて実行可能な計画に仕上げる方向で準備作業を進めて参りたいと思っております。

出来るだけ多くの方々にこの計画の立案に参画していただくための手始めとして、近いうちに、これまで司牧評議会等で出された資料等を添え、具体的に考えていただきたい点を記した文書を、小教区宛にお送りいたします。それらをご参考になり、忌憚ないご意見・ご提案をお寄せいただければ幸いに存じます。

私としましては、教区民全体の意見・要望を取りまとめ、皆さまにご了解いただける何らかの案がまとまった時点で、再建設実施のための委員会を設け、実現化のための作業に入りたいと考えております。

教区の皆さまのご支援・ご協力を賜りたいものとお願ひ致します。

カテドラルの再建設は、私ども教区民の信仰と一致の「しるし」ともいふべき事業と思われます。一人ひとりの祈りと協力によって、私どもに託された使命は遂行されていくものと信じております。未来の仙台教区発展の礎いしなとなるであろうカテドラル再建設のために、共に祈りつつ歩んで参りたいと思ひます。